

内富庸介、藤森麻衣子（編）

がん医療における コミュニケーション・スキル [DVD 付]

悪い知らせをどう伝えるか

宇都宮宏子

（京大病院・ネットワーク医療部）

京大病院に「退院調整看護師」として着任し、この7月で7年目に入った。

病院勤務を経て、在宅で訪問看護・ケアマネジャーを経験し、人は、生活の場にいるからこそ、「生きる強さ」「人としての強さ」を発揮できることを実感した。家の力、地域の力、そのなかで生活者としての力、患者の強さを見て家族もまた力を発揮する。

24時間体制の安全管理を強く求められる環境から、医療者のいない、家族も常時いない家に帰すとき、「医療提供をマネジメントすること」が当然必要だ。入院医療から在宅医療への移行支援においては、専門的な知識やコミュニケーション・スキルを持つことは当然として、チーム医療内で、患者・家族と、地域事業所との“調整力”も求められる。

特にがん患者の支援は、依頼さ

れる患者数も多く、またほとんどの患者が「治療ができなくなった」「終末期」という、患者にとっては「悪い状態」に直面する時期に私たちは初めて会うことになる。

私の在宅の経験では、病院に医療提供を望んでくる患者とは違う、「家の主人である利用者」と“お邪魔します”と訪問する私たちの関係のなかで、医療・看護を提供するためのコミュニケーション・スキルや、患者の“声なき叫び”に応えるためのスキルが必要であった。その経験を生かして、面談時の注意や配慮、そして何より、患者の感情表現に焦点を当てて共有する聞き方・話し方をこれまで重視してきた。

そういった経験をしてきたなかで、この本に出会った。「患者が望むコミュニケーション」とはどのようなものか、国立がんセンター東病院での調査結果を踏まえて、

「悪い知らせを伝えられる際の患者の意向要素」を、頭文字から“SHARE”として紹介している。

さらには、米国で「悪い知らせ」を適切に伝えるための段階を踏んだ手順としてまとめられた「SPIKES」の紹介と、わが国での注意点も提示している。病棟の若い看護師やMSWたちに、コミュニケーションのコツを教えることに悩んでいた私にとって、この本は絶好のテキストになった。

患者にとって悪い知らせを、どのように伝えるか。そこから患者・家族がまた「生きよう」と前を向くための支援が、退院支援だ。最期の瞬間まで、その人らしい時間を、人生を送れるように、残された家族が命を、魂をつなげるような生き方を患者・家族と一緒に考える。このプロセスこそが、何より退院支援のポイントであると考えている。

ぜひこの本を、バッド・ニュースから次の希望につながるコミュニケーション・スキルの向上に役立ててほしい。

●A5/頁 152/2007 年/定価 2,940 円
（本体 2,800 円＋税 5%）
[ISBN978-4-260-00522-7]
医学書院 刊